

# 氷見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)VI

2006年3月

氷見市教育委員会

# 氷見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)VI

2006年3月

氷見市教育委員会

# 序

東に富山湾を隔てた靈峰立山を仰ぐ氷見市は、古くより海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。

平成10年の日本海側最大の前方後方墳である柳田布尾山古墳発見は、大きなニュースとして市民に受け入れられ、改めて氷見地域の歴史に興味が示されるようになりました。

氷見市では市内の古墳の現況を把握するため、3カ年計画で丘陵地区の分布調査を実施しましたが、さらに調査を3カ年延長し、丘陵地区の全体の遺跡を把握することにいたしました。本書はその最終年度の報告書であり、文化財保護・活用の一助となることを願っております。

終わりに、調査にあたりましてご指導・ご協力を賜りました皆様に、厚くお礼申し上げます。

氷見市教育委員会

## 例　　言

1 本書は、氷見市教育委員会が国庫補助事業として6カ年計画で実施している丘陵部遺跡詳細分布調査第6年目（平成17年度）の報告書である。

2 調査は富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室の指導・協力を受けて、氷見市教育委員会が実施した。

3 調査参加者は次の通りである。

調査担当者：大野　究（氷見市教育委員会生涯学習課主査）

廣瀬直樹（氷見市教育委員会生涯学習課学芸員）

調査補助員：間野達（富山大学大学院人文学科研究科学生）、赤座裕子・伊藤剛士・岡島怜子・黒木甫・小林高太・小林智海・高橋彰則・竹中庸介・竹谷充生・徳井恵子・柄堀哲彦・水谷圭吾・用田聖実・吉田有里（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）

4 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、課長補佐上田和弘と廣瀬が事務を担当し、課長東海慎一が統括した。

5 本書の編集は大野が担当し、執筆は第2章を大野・廣瀬が、残りを大野が担当した。

6 調査にあたって、以下の機関・個人の方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

富山考古学会・氷見市史編さん室・氷見市立博物館

西井龍儀（氷見市史編さん委員会考古部会、富山考古学会）・宮田進一（氷見市史編さん委員会考古部会、（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）・水口俊雄（土倉地区）・福沢佳典（富山大学大学院人文学科研究科学生）・東良明・坂田裕之・横幕真（富山大学人文学部考古学研究室学生）

## 目 次

はじめに .....	1
第1章 本年度調査地区の地勢と研究史 .....	2
第2章 分布調査の成果 .....	5
第3章 土倉地区の調査 .....	15
おわりに .....	23

## 図 目 次

第1図 本年度の調査対象地区 .....	3
第2図 坪池・土倉・赤毛地区 .....	7
第3図 仏生寺地区（上原・細越・脇之谷内） .....	9
第4図 仏生寺地区（吉池） .....	11
第5図 小竹地区 .....	12
第6図 摩頂山の遺構 .....	14
第7図 ゴマジマチ屋敷跡略測図 .....	16
第8図 養安寺塚略測図 .....	17
第9図 石造物実測図（1） .....	19
第10図 石造物実測図（2） .....	20
第11図 石造物実測図（3） .....	21
第12図 土倉地区周辺の街道 .....	22

## 図 版 目 次

図版1 分布調査の成果（1）
図版2 分布調査の成果（2）
図版3 分布調査の成果（3）
図版4 分布調査の成果（4）
図版5 分布調査の成果（5）
図版6 分布調査の成果（6）
図版7 分布調査の成果（7）

## はじめに

氷見市では平成10年の柳田布尾山古墳の発見以後、氷見市史編さん委員会考古部会の調査によって多数の古墳が発見され、また一部の主要な古墳の測量調査が実施された。氷見市教育委員会では市史関連の調査の成果を元に、文化財保護の立場から市内の古墳の現況の把握と確認のため、丘陵地区の分布調査を平成12年度から3カ年計画で実施した。

3カ年の調査により、市内の古墳分布についてはかなり明らかにすることができたが、古墳よりもさらに奥まった場所に立地する山城や宗教関連遺跡などについては、まだまだ実態が十分に把握されていない状況である。

そこで氷見市では丘陵地区の分布調査をさらに3カ年延長し、古墳とは立地条件を異にする山城や宗教関連遺跡について、分布調査をおこなうことになった。

第6年目にあたる平成17年度は、市南部地区を対象とし、踏査・測量・実測などの作業を行った。調査期間は平成17年9月1日から平成18年3月19日までである。

(大野 究)



調査風景

## 第1章 本年度調査地区の地勢と研究史

氷見市は富山県の西北部に位置し、地理的には能登半島の付け根東側にある。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230m<sup>2</sup>、人口は約5万6千人である。

市域は南・西・北の三方が標高200~500mの丘陵に取り囲まれ、東側は約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。市北半部は上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外はまとまった平野が少ない。市南半部は主として布勢水海が堆積してできた平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる。

本年度は主として市南部地域の丘陵を対象地区とし、上庄川水系の上流部、仏生寺川水系の上流部、小竹川の上流部の踏査を行った。

上庄川水系と仏生寺川水系の上流部の丘陵地帯は、分水嶺がほぼ高岡市との市境となり、高岡市側では西山丘陵と呼ばれている。氷見市と高岡市、及び石川県との境界に位置するのが、標高501.7mの大釜山であり、分水嶺はここから東に向けて延び、標高264mの三千防山を経て海老坂峠に至っている。

一方、小竹川水系の上流部の丘陵は、二上山丘陵にある。二上山丘陵は標高273mの二上山、標高256.9mの城山、標高251mの摩頂山、標高253.6mの大師ヶ岳などの峰からなる。二上山丘陵の大部分は高岡市域であるが、摩頂山とその周辺地域が氷見市域になっている。

上庄川水系の上流部では、坪池・土倉地区に周知の埋蔵文化財包蔵地がある。坪池白坂遺跡（縄文時代）、土倉ゴマジマチ遺跡（縄文時代）、土倉稻村遺跡（縄文時代）と、市指定文化財の宝篋印塔の所在する坪池シャンドン遺跡（中世）である。

仏生寺川水系の上流部では、仏生寺地区に二ツ城跡（中世、主要部は高岡市域）と山川経塚（中世、主要部は高岡市域）、堀田地区に堀田長尾遺跡（詳細不明）、蒲田地区に蒲田A遺跡（詳細不明）、神代地区に神代テラヤシキ遺跡（中世）が所在する。

小竹川上流部では、小竹遺跡（中世）と大師ヶ岳遺跡（詳細不明）が所在する。

このように、本年度の対象地区は、縄文時代と中世の山城や宗教関連の遺跡が若干確認されているが、系統的な分布調査は実施されていないため、詳細な点については不明な点の多かった地域である。

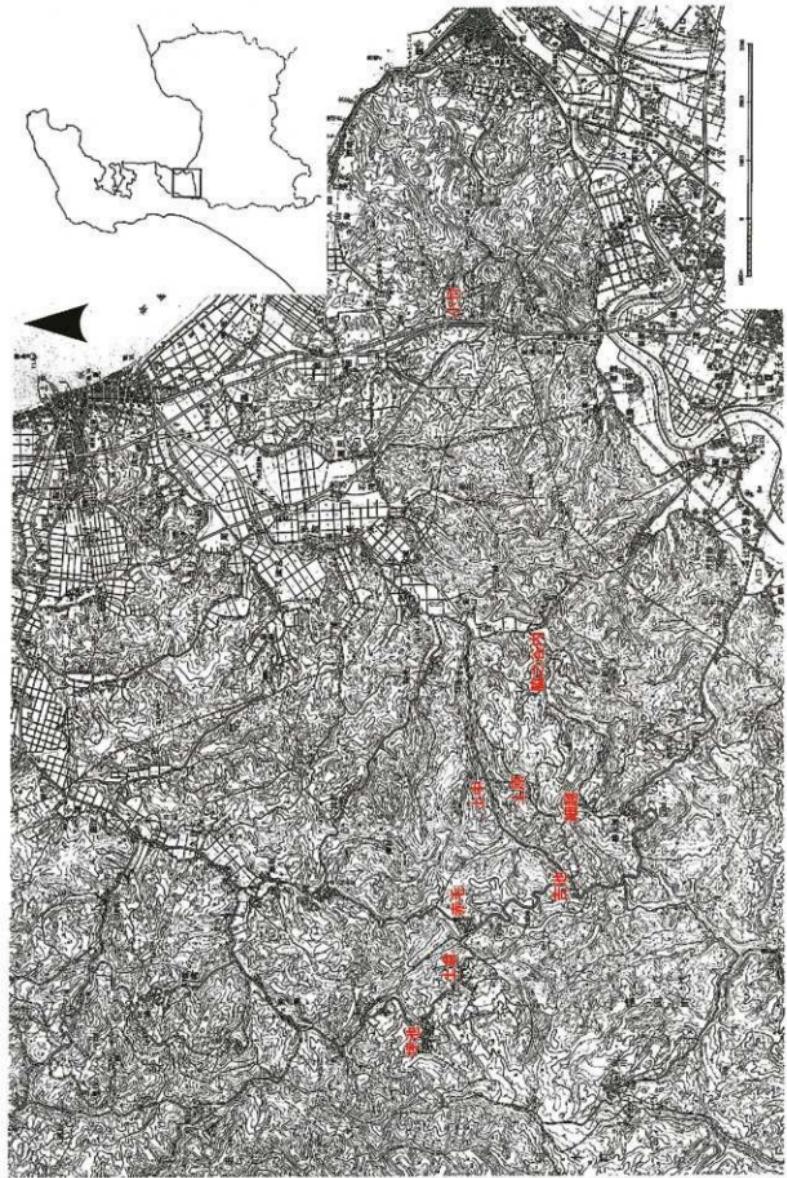
文献では仏生寺寺中地区に所在する御田神社関係の資料が若干ある。

「日本三代実録」によれば、貞觀3年（867）10月5日に越中國從五位下御田神へ從五位上が授けられ、さらに元慶3年（879）2月8日には正五位下が授けられている。

永和元年（1375）5月には、足利義満が幕府奉公衆進士氏に対して三田社地頭職を安堵しており、天文15年（1546）3月には神保氏被官鞍河氏とみられる新蔵人職綱が金鶏山白山社に禁制を下している。

なお、地元での伝承によれば、往古御田社の別当寺として金鶏山仏生寺という寺院があったが途絶え、地名として残ったという。

また、現在飯久保地区に所在する真宗大谷派光久寺の前身は、仏生寺吉池地区に創建された真言宗寺院、風香山玄巣院と伝えられる。吉池の故地には記念の石碑が建立されており、中世の石造物が集積されている。寺伝では康永2年（1343）に狩野宣久が飯久保の地へ移し、浄土真宗に改宗し、光久寺と改めたという。



第1図 本年度の調査対象地区

一方仏生寺脇之谷内地区と高岡市との境に所在する三千防山には往古天台系の寺院があったと伝えられ、その名残の地名として高岡側には「無常谷」「仏谷」「天ヶ峯」「鐘撞堂」「院清水」「名号谷」などがあり、脇之谷内には「宝珍坊」「経門坊」「幸善坊」「道善坊」と呼ばれる家や参道があり、尾矢家は茶屋を営んでいたという。

次に、二上山丘陵のひとつ、摩頂山には現在弘源寺が所在する。ここは現在高岡市西田に所在する臨濟宗国泰寺派本山国泰寺の前身である東松寺が所在した場所である。永仁4年（1296）、慈雲妙意が山中に庵室を構えたのに始まり、正安年間（1299～1302）に東松寺を開創したという。

摩頂山には城郭関連とみられる防衛遺構や宗教関連とみられる平坦面などの遺構が多く遺存している。さらに過去において389枚の銅鏡も出土している。これらを含めて現在小竹遺跡として周知している。

（大野 究）

## 第2章 分布調査の成果

第1章に記したように、本年度踏査を実施した上庄川水系上流地区、仏生寺川水系上流地区、小竹川上流地区は、地名や伝承などから、中世における宗教関連遺跡の存在が予測された地域である。

これらの地区を対象にして、周知の埋蔵文化財包蔵地や中世石造物集積地の現況確認と、新たな遺構・遺物の有無についての確認を行った。

しかし、今年度は残念ながら新たな遺構・遺物の発見はほとんど無かった。以下では市教委が周知しつつもこれまで公表していなかったことを含めて、対象地区に対するまとめとして記述を行いたい。

### 坪池地区（第2図）

上庄川の支流坪池川両岸に開けた集落である。坪池では嘉永2年（1849）6月に、大規模な地滑りが発生しており、これにより約40戸あった集落の半数近くが場所を替え、寺院と神社も現在地に移転したという。中世石造物の集積地として主要なものが以下のように2箇所ある。

通称ラント地区（第2図1）は、集落北端の丘陵斜面に設けられた墓地であり、標高は約225mである。現代の墓石の脇に中世石造物が集積されている。五輪塔形浮彫板石塔婆2、方錐角柱形板石塔婆1、五輪塔火輪4、五輪塔水輪1、五輪塔地輪1がある。

通称フルヤシキ地区（第2図2）は、集落北側の水田畦に設けられた墓地であり、標高は約200mである。現代の墓石の脇に中世石造物が集積されている。方錐角柱形板石塔婆1、五輪塔空風輪2、五輪塔火輪1がある。

一方、坪池シャンダン遺跡（第2図3）は集落の東側、土倉地区との境に近い標高約250mの独立丘陵状の尾根頂部に所在する。山頂部は東西約14m、南北約8mの平坦面で、その中央に直径約5m、高さ約1mの塚が所在する。この塚の上、頂部からやや東寄りに宝篋印塔が1基造立されている。

宝篋印塔は平らな台石の上に積み重ねられており、基礎上・基礎下・塔身・笠・相輪からなる。石材は瀬浦海岸に産する微粒砂岩（萩田石）である。基礎を上下に分割している例は氷見では珍しく、運搬の便のためであろう。相輪の宝珠と受花を欠損し、笠の隅飾りや基礎の一部に欠き傷をもつが、全体の構成をうかがうことのできる資料である。

塔身は正面の円相内に如来形坐像を浮き彫りにする。宝冠を戴き、両手は印相を結ぶが左手が上になる。右側面は方形の輪郭内に梵字「キリーク」を刻む。左側面も同様に梵字を刻むが、剥落のため判読はできない。

笠は上部が5段、下部が2段であり、隅飾りは2弧でやや外傾する。

相輪は伏鉢下部が欠損し、九輪は八輪まで残り、そこから上部は欠損している。

現状の全高は1.18mであるが、本来は1.36m程あったと推定される。隅飾りの形状から15世紀の造立と推定される。なお、この宝篋印塔は市指定文化財である。

地元では、「シャンダン」は「沙弥殿」が転訛したものと伝えられ、この人物は土倉地区の養安寺の先祖と兄弟であったという。

### 土倉地区（第2図4～7）

土倉地区については、第3章に成果をまとめた。

### 仏生寺（上原）地区（第3図）

仏生寺川右岸の丘陵斜面に開けた小さな集落で、標高約170mに位置する。氷見市史編さん委員会考古部会による現地踏査で、集落の南側に位置する通称アラデン又はアンガデンの丘陵尾根で塚が1基確認されている（第3図1）。標高は約270mである。また、この尾根の北側斜面では平坦面が3箇所確認されている（第3図2）。特に一番下の平坦面は東西約89m×南北約30mの大規模なものである。

#### 仏生寺（脇之谷内）地区（第3図）

仏生寺川支流脇之谷内川両岸に開けた集落である。この脇之谷内川右岸一帯の丘陵の分水嶺となる尾根に二ツ城跡の所在する三千防山や山川経塚が所在している。

二ツ城跡（第3図3）は氷見市と高岡市の境界に位置し、標高は約264mである。二つの郭と帶郭、堀切、堅堀が遺存する。

山川経塚（第3図4）は、高岡市山川地区の白山神社裏山の頂上、標高約182mの地点に位置し、一部は氷見市仏生寺地区に含まれる。頂上部に5~6m四方の集石があり、昭和32年頃その下から刀子1、珠洲破片、土師器破片が発見された。珠洲は12世紀後半頃の小型すり鉢である。

今回二ツ城跡と山川経塚の北側の丘陵一帯を踏査し、水田跡を含む複数の平坦面を確認したが、現況において中世の遺構と結びつけられるものはなかった。

#### 仏生寺（網越）地区（第3図）

脇之谷内川最上流部の集落で標高は約175mである。今回の踏査で、集落南側の共同墓地脇の地蔵を祀った祠に五輪塔空風輪2が納められているのを確認した（第3図5）。

#### 仏生寺（吉池）地区（第4図）

仏生寺川最上流地区の両岸に開けた集落である。集落北端の仏生寺川左岸の一角に、玄巣院故地が所在する（第4図1）。標高は約95mである。玄巣院は現在氷見市飯久保に所在する光久寺の前身と伝えられる。寺伝によれば、はじめ仏生寺吉池に創建された真言宗の寺院であったが、康永2年（1343）に狩野宣久が飯久保の地へ移し、浄土真宗に改宗し、寺号を光久寺に改めたという。故地には標石の他に中世石造物が多数有り、昭和44年に建てられたコンクリート製の保存舎に納められている。集積されている石造物は、五輪塔空風輪6、五輪塔火輪7、五輪塔水輪6、五輪塔地輪14、一石五輪塔1、一石一尊仏5（うち如来形3、地蔵形1、不明1）、方錐角柱形板石塔婆14（宝篋印塔陽刻板石塔婆2点含む）、板状剝石板石塔婆4点（うち1点は五輪塔形陽刻）、その他不明石造物數点と破片が十数片である。

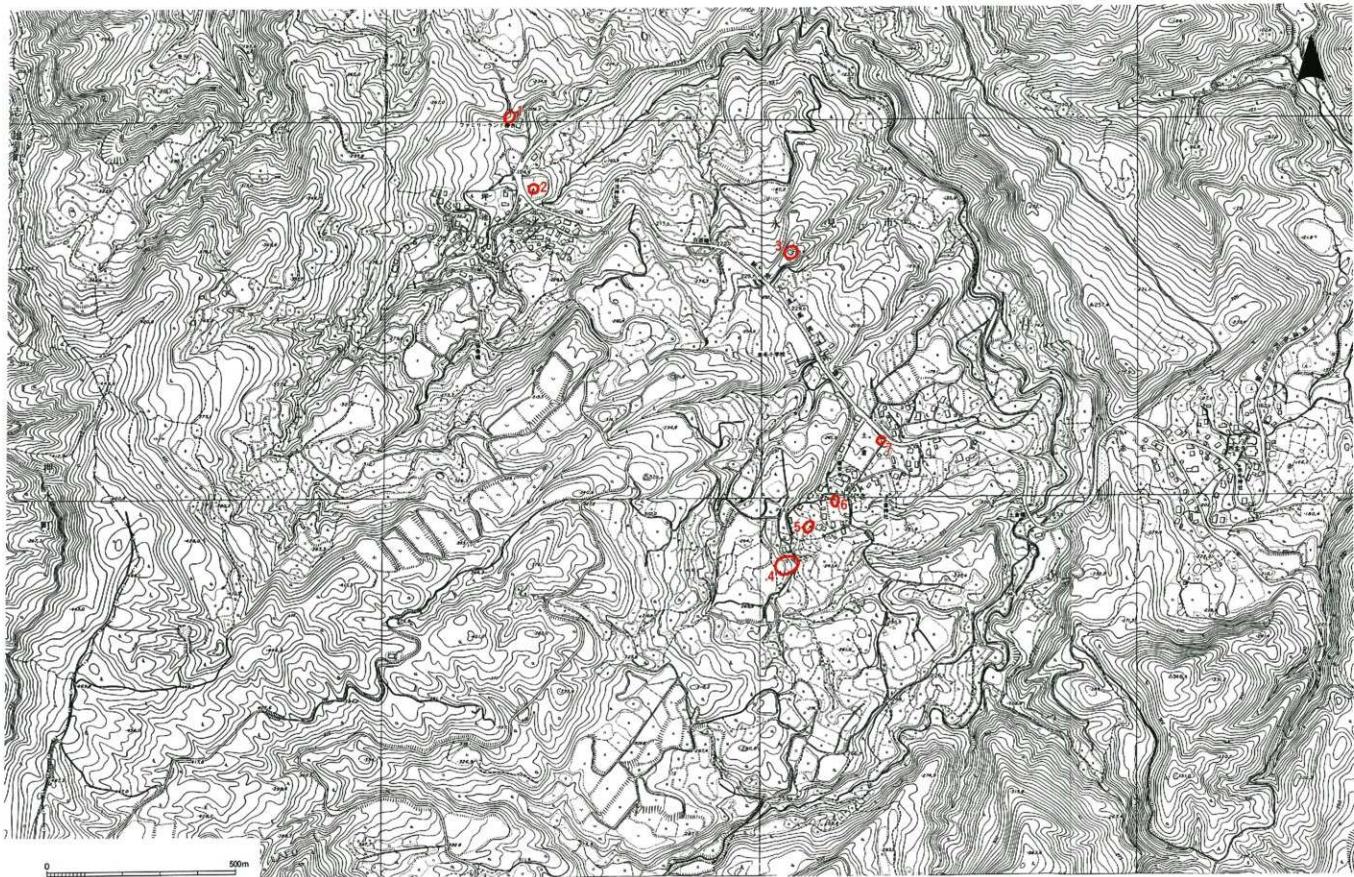
#### 小竹地区（第5・6図）

小竹川上流の摩頂山周辺の踏査を行った。摩頂山は二上山丘陵の一角を占め、標高は251mである。山中には性格の異なる遺構が複数みられるが、埋蔵文化財包蔵地としては小竹遺跡としてひとくくりにしている（第5図1）。

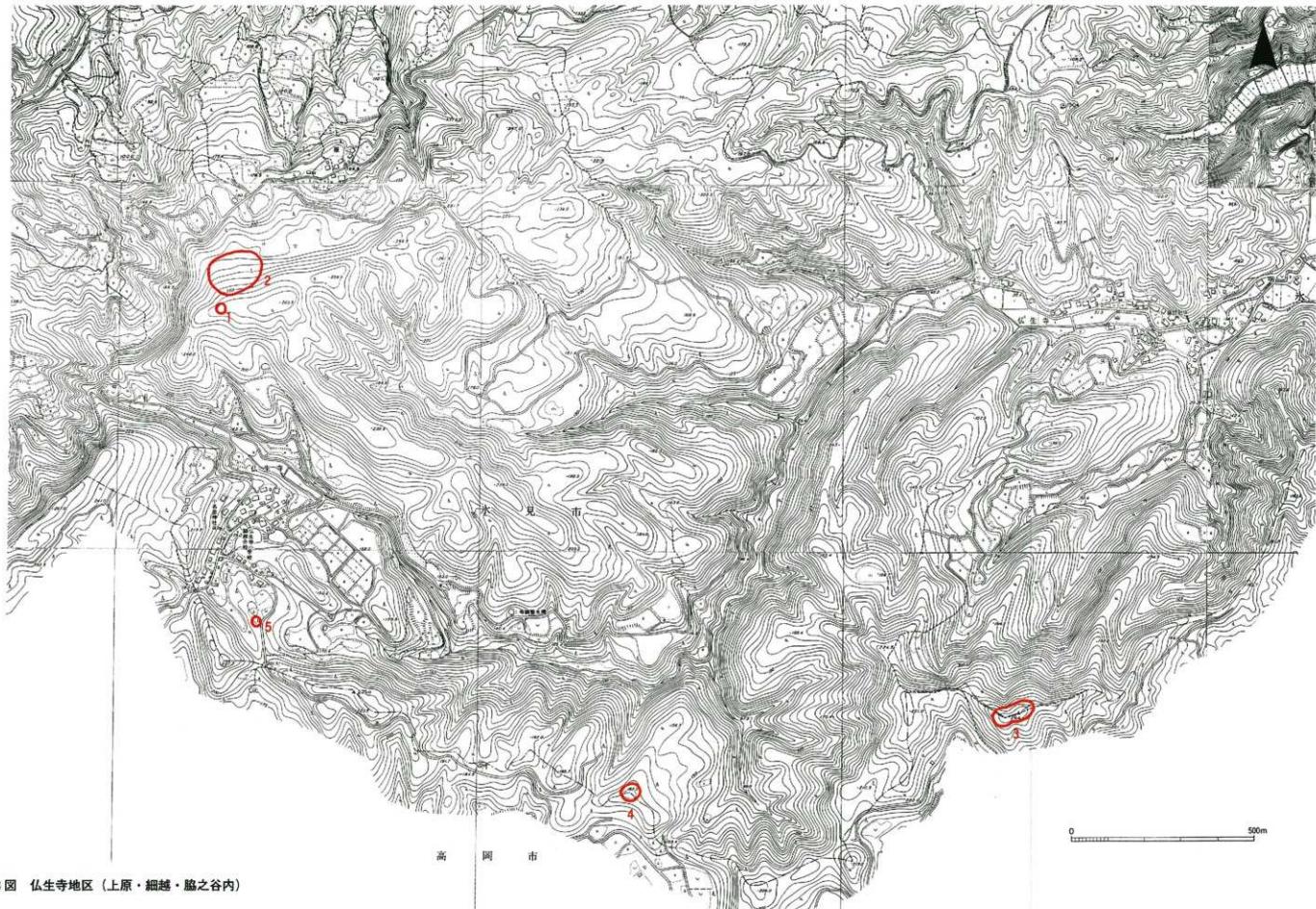
摩頂山の遺構については、京田良志氏を中心とした弘源桜寺総合調査団が調査を行い、成果がまとめられているが（弘源桜寺総合調査団1994）、今回改めて現況の確認を含めて調査を行った。

城郭関連遺構については、総合調査以後の新たな知見を含めた高岡徹氏の論考があるので、それに従い記述する。山頂部は東西120m程の細長い尾根であり、東寄りの最高所Aが主郭である。尾根中央には堀切1があり、その西側はやせ尾根が続きその先は、大規模な堀切と堅堀2~6が組み合わされて、堅固な防御となっている。さらにその下には屋敷跡の可能性がある平坦面Bがある。なお、地元では尾根周辺を「城壇」と呼んでいる。

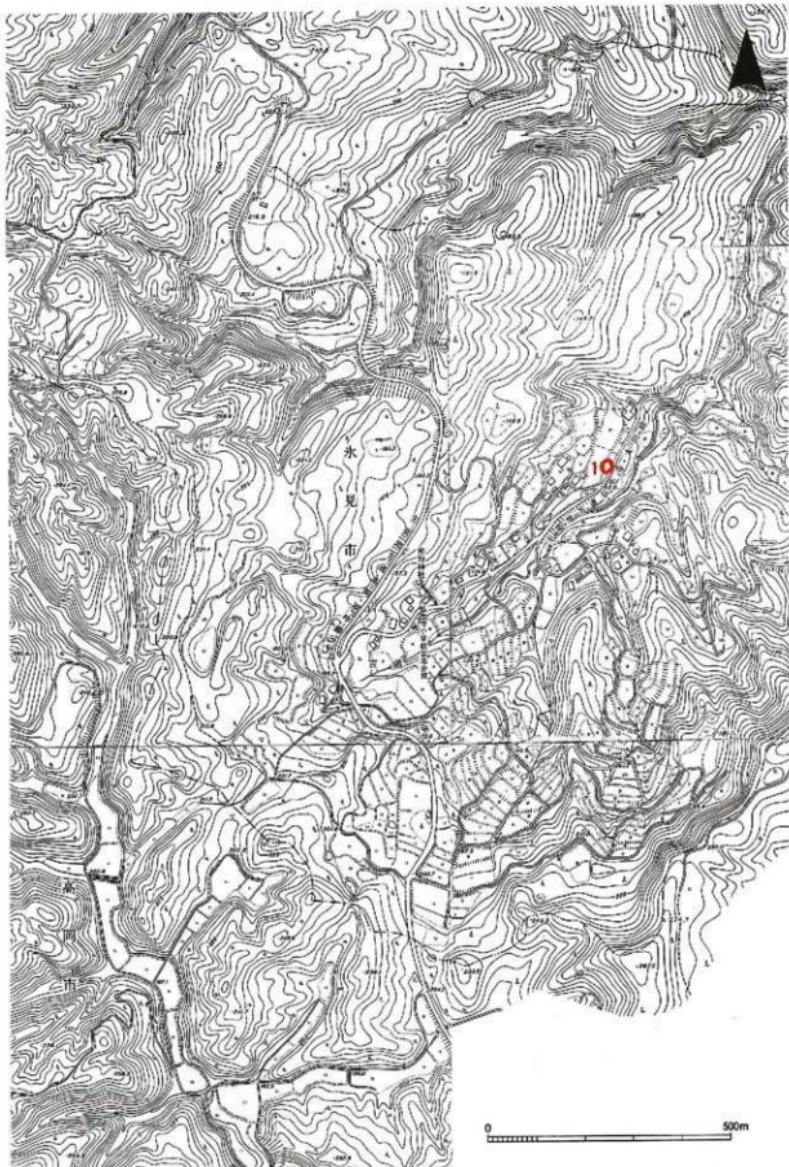
尾根の東側下には空堀7が設けられている。また林道を挟んだ反対側の支峰には堀切14~18を組み合



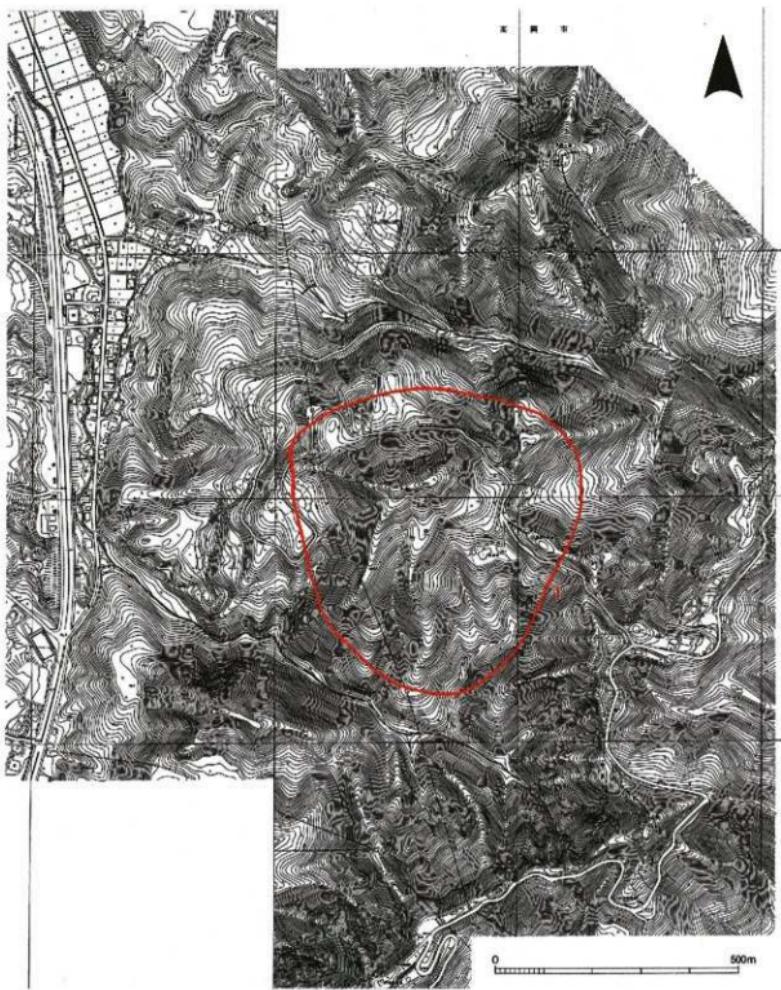
第2図 坪池・土倉・赤毛地区



第3図 仏生寺地区（上原・細越・脇之谷内）



第4図 仏生寺地区（吉池）



第5図 小竹地区

わせた小規模な郭」がある。

最高所から南に伸びる二つの尾根のうち、西側の尾根には水平距離で200mほど先に郭C・D・Eや切岸などが集まる。地元ではC郭あたりを「堂丸山」、D・Eの平坦面を「佐賀の平」と呼んでいる。「佐賀の平」には佐賀某という武将が居住していたと伝える。

一方、東側の尾根には堀切、豊堀、切岸による段が連続し、G・H・Iといった郭が設けられている。

次に宗教関連遺構については、まず、現在所在するものとして、弘源寺（本堂、土蔵、茶室）と毘沙門天堂がある。

弘源寺は、摩頂山南斜面標高約190mの地点に、東西約80m、南北約30mの範囲で開削した平坦面2に建てられている。なお、西井龍儀氏は弘源寺の位置を、摩頂山山頂と二上山山頂を結ぶ直線と、大師ヶ岳山頂と城山山頂を結ぶ直線の交点にあたることを指摘している。

本堂の背後には建物と方位をそろえた平坦面があり、その西側にも小規模な平坦面がみられる。

本堂裏から西に向かう山道が、林道開設以前の本来の参道であり、途中尾根上には秋葉社跡がある。秋葉社前面の参道は上記城郭関連遺構のところで堀切としたものである。

ここからさらに平坦面を越えて次の尾根にたどり着くと、門跡と推定される地点に至る。ここから参道は急斜面を下っていく。

弘源寺周辺では、林寺巣州氏などによって遺物が表採されており、時期的には古代（9～10世紀）のものと、中世（14～15世紀と16世紀後半）のものがある。また石造物では五輪塔空風輪2、五輪塔水輪1、宝鏡印塔基礎1が確認されている。

毘沙門天堂は、弘源寺東側の丘陵尾根に所在する。標高は約210mである。周辺にはこれ以外の遺構は見あたらない。なお、昭和6年にお堂を建て替えたとき、それ以前のお堂より敷地を拡張したところ、地中から3～5cmの小石に墨でお経の文字を書いたものが厚さ15cmにわたって敷き詰められているのが確認され、そのままこれを埋め戻し、敷地を造成したという。

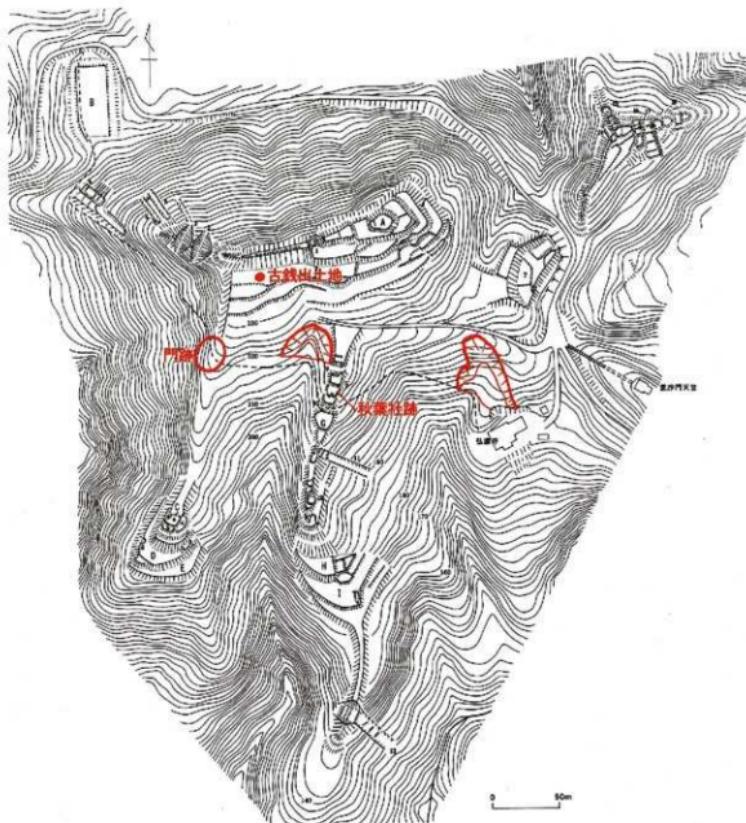
最後に、摩頂山最高所尾根西側から門跡推定地に向けて下りた標高240m程の地点で、古錢が389枚出土している。判明した中で最も古いのは唐の開元通宝であり、最も新しいのは明の永樂通宝である。

摩頂山の遺構について、城郭関連のものは、すぐ南側に位置する守山城の一部とみる意見と、それとは一線を画した独立した城とみる意見とがある。

一方、宗教関連の遺構については、国泰寺の前身である東松寺との関連について検討すべき課題が残されている。

また、これら城郭と宗教関連の遺構がどのように関わるのかも検討が必要であろう。

（大野 究・廣瀬直樹）



第6図 摩頂山の遺構（高岡徹氏作成の図（氷見市教委2001）に加筆）

### 第3章 土倉地区の調査

上庄川は、氷見市南西端の大釜山（501.7m）に発し、約22kmで富山湾に注ぐ市内最大の河川であり、その最上流部に位置するのが坪池・土倉・赤毛（大正4年までは赤羽毛）の三つの集落である。

第2章に記したように、坪池地区には中世石造物の集積地がいくつか確認でき、坪池シャンダン遺跡の宝鏡印塔も存在する。一方、赤毛地区の西念寺には天文15年（1546）3月の新蔵人職綱の制札が残されている。近年の研究により、この新蔵人職綱は、富山城主神保氏の被官で、上庄川下流域を本貫とした鞍河氏と推定されている。

このように、標高200mを越える山間地でありながら、これらの地域は中世後期から末にかけて、重要な役割を果たした地域と考えられる。

しかしながら、赤羽毛という地名に象徴されるように、これらの地区はこれまで地滑り災害にたびたび見舞われており、中世の遺構をとらえることが困難であった。

今回の分布調査でも、あまり成果がなかったのであるが、三つの地区のうち土倉地区においては、平成10年度に氷見市史編さん委員会考古部会が分布調査を行い、石造物集積地や、中世にさかのほる可能性がある遺構を確認している。これらの成果は未公表のままであったため、今回の調査の成果とあわせて紹介したい。

土倉地区には、縄文時代の石器が出土した土倉稻穂遺跡と土倉ゴマジマチ遺跡の2箇所の埋蔵文化財包蔵地があるので、それ以降中世までの様子は不明である。

土倉の文献上の初見は、文禄3年（1560）4月とされる「狩野良政書状（田畠文書）」である。この史料は、長尾景虎（上杉謙信）の進入によって越中が混乱する情勢の中で、飯久保城主狩野氏が沢川の田端氏に対して、今後の去就について聞いかけたものであり、この中に土倉三郎二郎の名前が登場する。沢川（高岡市福岡町）は土倉と分水嶺を挟んで背中合わせの集落であり、直線距離で約3kmである。田端氏は戦国期には能登の国人三宅氏によって、沢川と隣接する能登の山地三箇所を安堵されていた有力者であり、土倉三郎二郎も土倉地区の土豪と思われる。

その後文禄4年（1595）10月には土倉村を含む氷見郡14村の高、物成などの指出状が前田利家の所に提出されている。

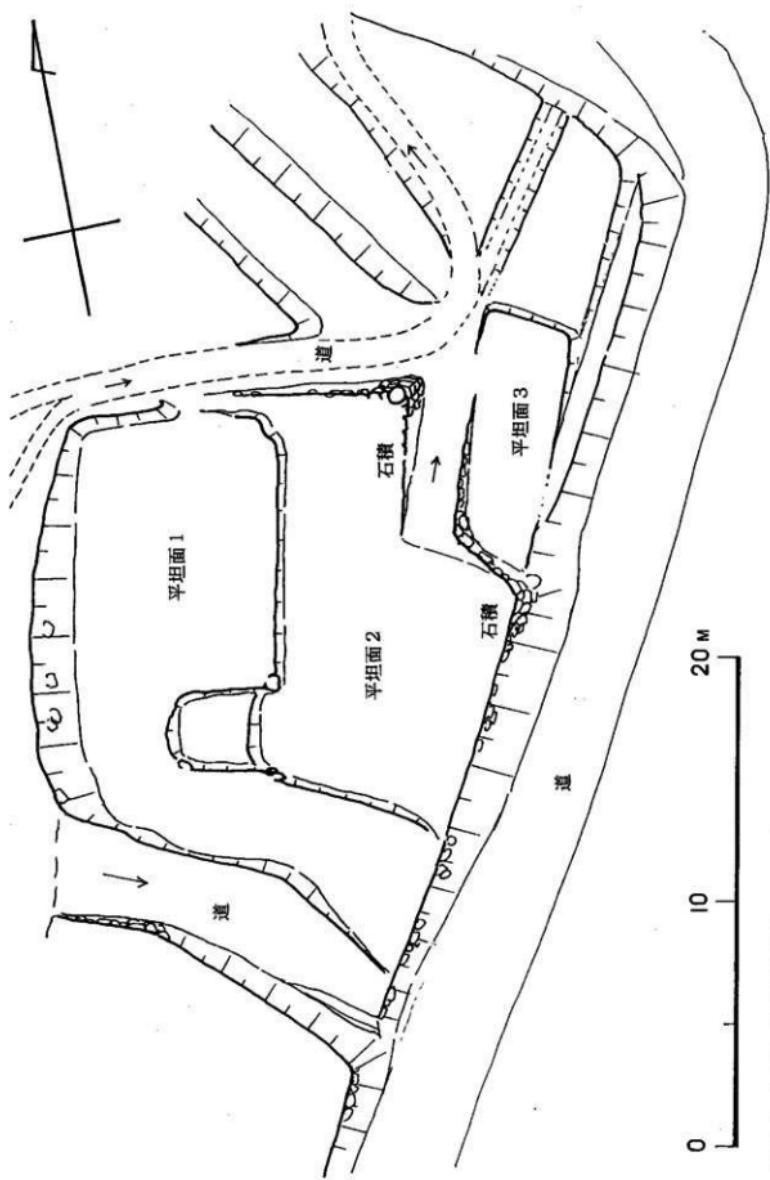
しかしながら寛文10年（1670）の村印は、土倉村単独ではなく、赤羽毛村と並記されており、以後、土倉村は赤羽毛村の枝村として位置づけられるようになった。

次に、土倉地区で確認された中世関係の遺構や遺物に関して紹介する。

ゴマジマチ屋敷跡（第2図4）は、北東に向かってV字型に張り出した二つの丘陵の付け根に当たる最高所（標高約260m）に所在する。ここは土倉集落草分けの屋敷跡と伝えられる。三箇所の平坦面があり、一部に石積が残っている。

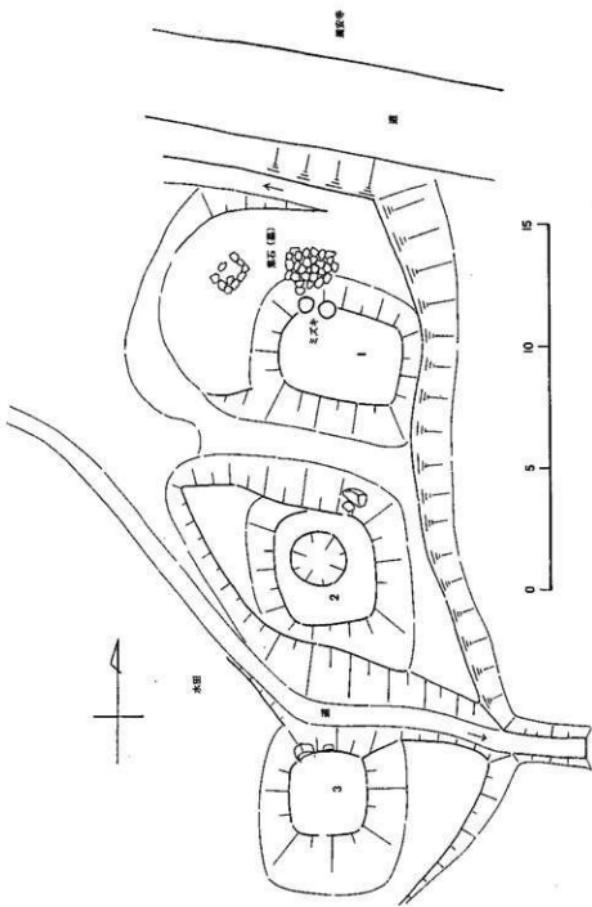
平坦面1は西端に所在する。南北17m、東西8mの主要部の南側に東に向けて南北4m、東西7mの張り出しが付き、L字型を呈する。張り出しの付け根部分が南北2.5m、東西3m平坦面2に向けて落ち込み、平坦面2からの出入口になっている。

平坦面2は南北16m、東西9mであり、北東部は平坦面3によってくりこまれ、北側の道へ向けて下る道が付いている。その角の部分に石積が残る。



第7図 ゴマジマチ屋敷跡測定図  $S = 1/200$

第8図 善安寺探検測図 S = 1/200



平坦面3は南北10m、東西3mであり、平坦面2との境に石積が残る。

土倉古墓地（第2図5）は、ゴマジマチ屋敷跡から一段降りた棚田状の水田脇、民家背後の竹林に位置する。標高は約230mである。南東向きの斜面に段々が造成され、その中程大きな藤の木根元に如来形石仏一体が立てられている。実測図を第9図1に示した。石材は粗粒砂岩いわゆる岩崎石である。高さ52cm、最大幅21cm、厚さ12.5cmを測る。15世紀代のものと推定するが、彫りがやや深く、表面全体が苔で覆われているためはつきりしないが蓮華座の表現がありそうである。これらはやや古い様相であろうか。すぐ前の民家では古くから「オカノカミサン」としてこの石仏を祀ってきたとのことである。また、ここからは以前に灰色の壺や骨片も出土したという。地山の石か古墓とかかわるかは不明であるが、幅20mの範囲に大きさ50~60cmの石が散在している。

養安寺塚（第2図6）は、養安寺境内南側、道路をはさんだ崖上に所在し、3基の塚が南北に並んでいる。いずれも一辻6~7m、高さ1~1.3mで方形を呈する。北側の塚上には二本に分かれたミズキの大木があり、その根元に集石が2箇所ある。

ドウ（ゾウ）ノ坂石仏・石塔群（第2図7）は、県道から集落内へ入る道の分岐点西側の高台に位置する。標高は約210mである。ドウノ坂はかつて石敷であり、この坂に地蔵が転がっていたという。現在集積されているのは台地の縁で、「久目村史」によれば、明治初めに民家建築工事で出土した伝承がある。現在確認できる石造物は以下のとおり。

片足踏み下げ地蔵1（微粒砂岩（藪田石））、如来形一石一尊仏1（粗粒砂岩）、五輪塔空風輪1（粗粒砂岩）、五輪塔火輪3（微粒砂岩（藪田石））、五輪塔水輪1（砂岩）、五輪塔地輪か2（砂岩）、角錐形板石塔婆3（微粒砂岩（藪田石））、茶臼1（砂岩）、その他不明石造物1（微粒砂岩（藪田石））、板石（台石か）3（砂岩）。

以上17点のうち8点を第9~11図2~9に示した。

2は如来形一石一尊仏である。上半身を浅く浮き彫りにしている。高さ36cm、幅24cm、厚さ10cmを測る。石材は粗粒砂岩である。

3は方錐角柱形板石塔婆である。上部と左側面を欠く。高さ約38cm、幅約20cm、厚さ10cmに復元できる。梵字はかなり摩滅しているが、「パン」と思われる。石材は微粒砂岩（藪田石）である。

4は方錐角柱形板石塔婆である。上部と左下を欠く。高さ43cm、幅19cm、厚さ14cmに復元できる。梵字は「パン」である。石材は微粒砂岩（藪田石）である。

5は方錐角柱形板石塔婆である。全体的に摩滅している。高さ50cm、幅22.5cm、厚さ14cmを測る。梵字は不明である。石材は微粒砂岩（藪田石）である。

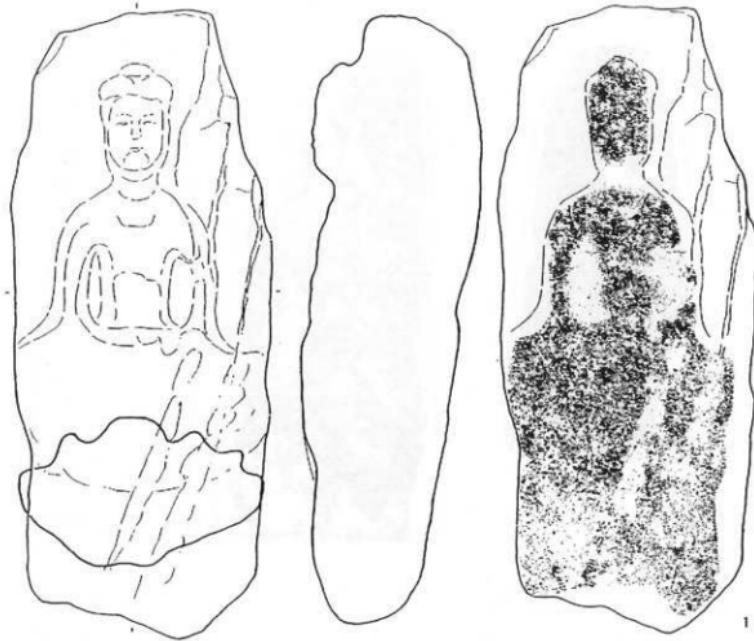
6は五輪塔空風輪である。空輪と風輪の境があいまいなタイプのものである。高さ16.5cm、風輪直径10cmである。石材は粗粒砂岩である。

7は五輪塔火輪である。やや扁平で軒先は上端だけが反る。高さ16cm、幅26cmを測る。石材は微粒砂岩（藪田石）である。

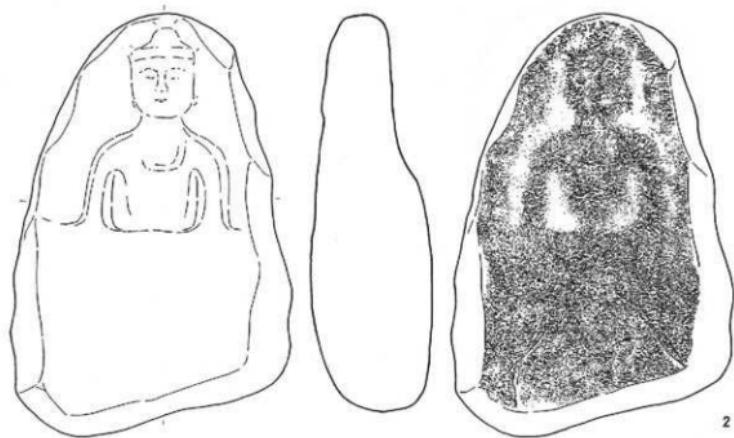
8は五輪塔火輪である。やや扁平で軒先は上端だけが反る。高さ14.5cm、幅24cmを測る。石材は微粒砂岩（藪田石）である。

9は五輪塔水輪である。最大径が上半部におさまる梵字「パン」を彫る。高さ16cm、最大幅24cmである。石材は粗粒砂岩である。

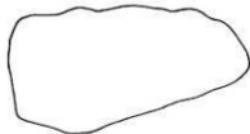
以上の石造物を15世紀代の水見市藪田葉師中世墓の資料と比較すると、一石一尊仏や板石塔婆は特徴



1

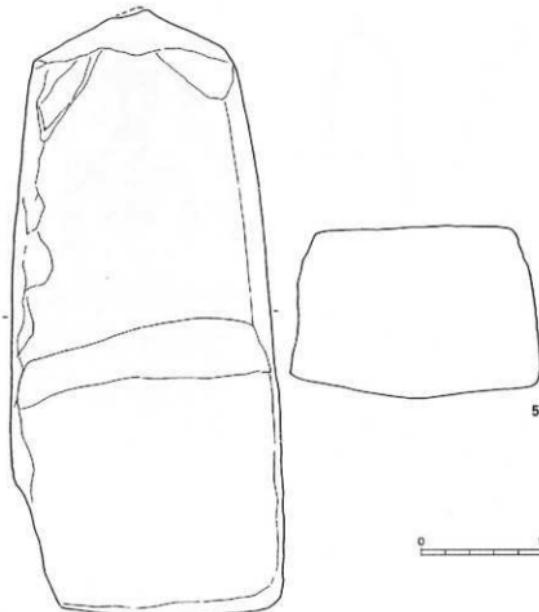
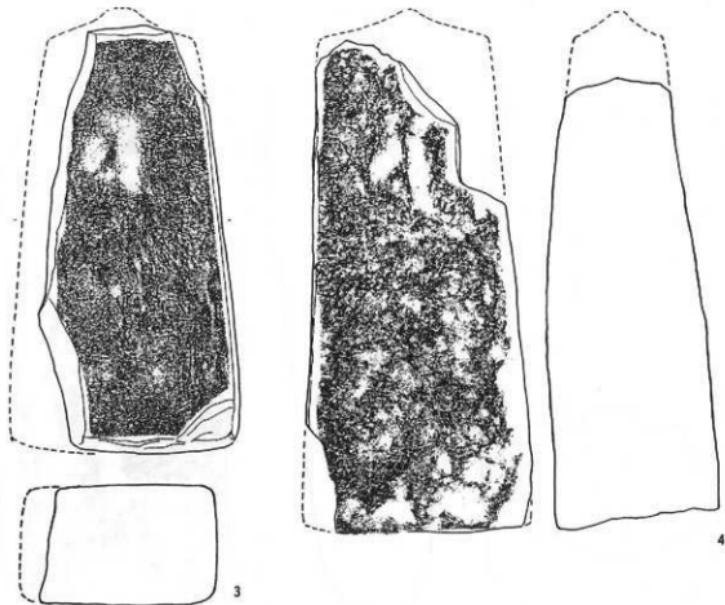


2



0 10 20cm

第9図 石造物実測図 (1) S=1/4 1:土倉古墓地、2:ドウノ坂



0 10 20cm

第10図 石造物実測図(2) S=1/4 ドウノ坂

がほぼ一致するものの、五輪塔はやや時期が下がる傾向である。ドウノ坂の資料は、15世紀後半から末頃としておきたい。

なお、ドウノ坂の道を挟んだ東側は、かつて禪寺があったと伝承されている場所であり、金剛輪が出土したという。

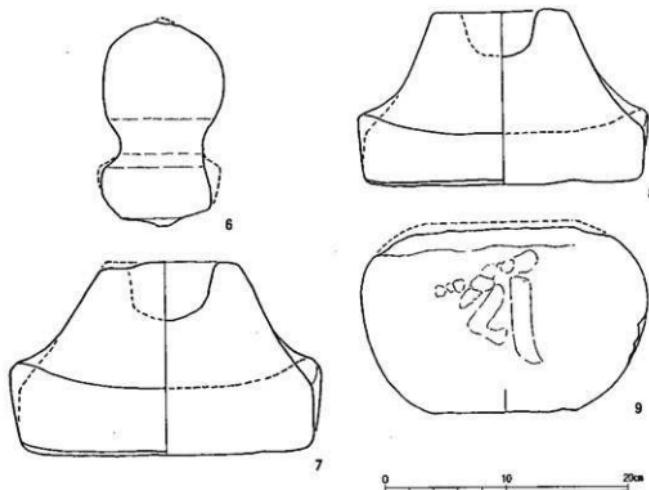
土倉地区を初めとする上庄川上流地域の集落は周辺部とどのように結びついていたのであろうか。第12図は土倉及び周辺の集落について、文政6年(1823)「射水郡分間絵図(高樹文庫)」に示された道筋を、明治43年測量図を参考にして近年の地図に朱線で記入したものである。上庄川最上流の集落からは、大坂峠を越えて、仏生寺吉池集落の西側を通り、勝木原集落へ至る道筋があった。さらに勝木原から広谷川沿いに下ると、砺波郡の小矢部川左岸地域に至ることができる。

一方、坪池集落からは能越国境沿いを進み沢川集落へ至る道筋があった。この道筋の途中には、西へ分岐して宝達山を越えて能登押水地域へ至る道筋もあった。沢川からは、渕ヶ谷・花尾・石堤を経て、やはり砺波郡の小矢部川左岸地域に至ることができる。

なお、坪池集落のほとんどの家は、沢川の光永寺と、慶長年間まで岩坪に所在した超願寺(現、高岡市片原横町)の門徒である。

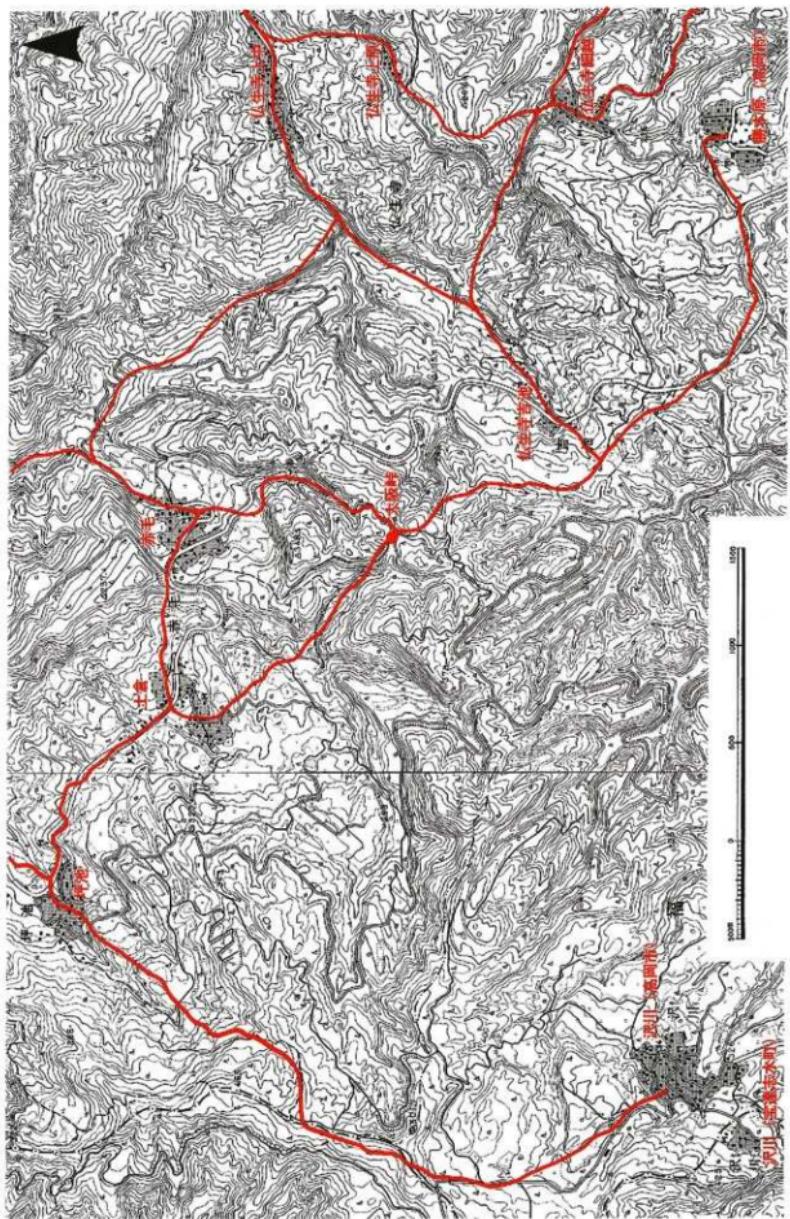
これらの道筋は基本的には中世にさかのばることができるものと推定されるが、土倉地区をはじめとする上庄川最上流の地域は、上庄川下流地域だけではなく、砺波地域や能登押水地域とも密接な関わりをもつ地域であったといえよう。

(大野 究)



第11図 石造物実測図(3) S=1/4 ドウノ坂

第12図 土倉地区周辺の街並



## おわりに

丘陵地区を6ヶ年かけて踏査する分布調査がひとまず終了した。それ以前の平野部の分布調査と合わせると、平成5年度から13ヶ年を費やしたことになる。

来年度は若干の補足調査を行い、第三版となる埋蔵文化財包蔵地地図を作製する予定である。

しかしながら、広大な氷見市域全てを踏査できたわけではない。また、一度踏査すれば事足るというものでもない。今後も繰り返し埋蔵文化財の有無の確認、範囲の見直しなどの作業が必要である。

年を追うごとに、丘陵部にはますます人が入りにくくなつた。山間の水田や畑の耕作が打ち切られ、台風などで倒れた木もそのままである。ここ数年は、これまで氷見市では生息が確認されていなかった熊が、出没するようになっている。

埋蔵文化財を保護することを考えれば、人が入りにくいことは良いことなのかもしれない。しかし文化財は、我々がその存在と内容を認識しているからこそ、重要な価値が生じるのであって、そこから遠ざかり、やがては忘却してしまうのならば、それは破壊に等しい行為であろう。

近年、荒れた里山を見直したいという地区が増え、その中で山城や古墳を地区の宝として整備したいという相談がいくつか寄せられるようになった。

地区の人と草むらに埋もれているのを苦労して探し出し、実測をした石造物集積地を何年か後に訪ねると、きれいに草が刈られ、花が供えられているのを見たこともある。

文化財が、地区の歴史を知る上で大切なものとして、市民の生活の中に存在し続けることができるためにも、分布調査は基礎的な作業として今後も必要であろう。

(大野 究)

## 参考文献

- 大浦積一 1997 「小竹の摩頂山」『氷見春秋』第35号
- 久目村史刊行委員会 1990 『久目村史』
- 弘源禪寺総合調査団 1994 『越中二上山と国泰寺』 桂書房
- 児島清文 1962 『氷見市地名考』
- 三千坊山を中心とした西山を愛する会 1989 『歴史の散歩みち』
- 氷見高校歴史クラブ 1951 『昭和25年度研究調査報告集』
- 氷見市 1998 『氷見市史』3 資料編一 古代・中世・近世（一）
- 氷見市 1999 『氷見市史』9 資料編七 自然環境
- 氷見市 2002 『氷見市史』7 資料編五 考古
- 氷見市教育委員会・富山県砂防課 1985 『富山県氷見市戸田薬師中世墓発掘調査報告書』
- 氷見市教育委員会 2001 『氷見の山城』
- 氷見市教育研究所 1992 『復刻版 氷見郡郷土誌』
- 氷見市十三公民館 1993 『十三谷の地名』
- 廣瀬直樹 2002 『氷見の宝鏡印塔陽刻板石塔婆』『氷見市立博物館年報』第20号
- 福岡町役場 1969 『福岡町史』
- 宮田校下自治会連絡協議会 1995 『宮田村史』

## 図 版

図版1 分布調査の成果(1)



坪池ラント地区の石造物



坪池フルヤシキ地区遠景



坪池フルヤシキ地区の石造物

図版2 分布調査の成果(2)



坪池シャンドン遺跡の宝篋印塔



山川経塚の所在する白山神社



仏生寺細越地区共同墓地のお堂内

図版3  
分布調査の成果(3)



仏生寺脇之谷内地区山中の水田跡



仏生寺吉池地区玄巣院故地



摩頂山城跡 A郭からの眺望

図版4 分布調査の成果(4)



摩頂山城跡C郭の様子



摩頂山城跡B郭からの眺望



弘源寺入口

図版5 分布調査の成果(5)



弘源寺境内の五輪塔



弘源寺境内の宝蓋印塔



弘源寺門跡の石仏台石

図版 6 分布調査の成果(6)



土倉ゴマジマチ屋敷跡遠景



土倉古墓地



土倉古墓地の一石一尊仏

図版7 分布調査の成果(7)



土倉古墓地の露出石材



養安寺塚



ドウノ坂の石造物

平成18年3月25日 印刷  
平成18年3月31日 発行

永見市埋蔵文化財調査報告第48冊  
永見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)VI

編集・発行 永見市教育委員会  
〒935-0016 富山県永見市本町4番9号  
TEL 0766-74-8215 (生涯学習課)

印 刷 株式会社アヤト